

老いをあらわすことば (2)

—新聞にみる戦後40年の推移—

遠 藤 織 枝

—はじめに—

「老女二人はねられ死ぬ」(1978. 3. 13『朝日』夕)「足立で老人焼死」(1988. 2. 2『毎日』夕)のようなみだしの新聞記事をよくみかける。これらの「老女」なり「老人」なりの年齢が最近あがってきているような印象をうけている。以前は50代後半で「老女」とされ「老人」とされていたのが最近70代以降のひとをそのようなことばでさすように変化してきているのではないかと。

また、「老人」「老女」などといわず「アパート火災、足不自由75歳死ぬ」(1988. 1. 27『毎日』夕)のように年齢だけをかく記事がふえてきているような気がする。

一方で「老人」の語にこだわる傾向もつよまって、東京都は「老人福祉部」を88年4月から「高齢福祉部」と改称、千代田区でも利用者の希望で「老人福祉センター」を86年4月に「高齢者センター」とかえている。

こうした印象や傾向を実態としてあとづけたい、というのが小論のねらいである。

この実態をしるには、カキコトバとハナシコトバのふたつの面からせまる必要があるが、ここではカキコトバの例にかぎった。日本の社会のなかでのカキコトバの推移をうつしだしているものとして新聞を対象にした。

今年1988年を基準にして10年単位にそのうごきをみるとし、1978年、1968年、1958年、1948年の各1年間の5つの時点に調査をしぼった。ただし、1948年は新聞のページ数も4ページ程度で記事量もすくないので1949年とあわせて2年分してみた。また、本1988年は途中なので、昨1987年9月から本年8月までを1年とした。

これらを『朝日新聞』(以下『朝日』と略記する)『毎日新聞』(以下『毎日』と略記する)の2紙の縮刷版(『毎日』の1948・49年はマイクロフィルム)で、調

べた（下線はすべて遠藤がつけた）。

「老人」「老夫婦」のような語がミダシに使われるのは主として社会面と地方版であるから、これらの面を対象とし、「逃げ遅れた老女を救出」（1988. 1. 24『毎日』）のようにミダシの語句に高齢者をあらわす語句がつかわれているものをすべてひろい出すことにした。そして、それらの「老人」なり「老女」なりが何歳のひとのことなのかを記事のなかからさがした。

このようにしてえた資料をもとにして以下にその結果を報告していく。

I 語彙面からみた推移

I-1 「老婆」から「老女」へ

以上のようにしてあつめた記事の高齢者をしめす語に、戦後まもない1948年ころにはよくつかわれ、最近ではまったくつかわれていない語がある。また、1948年代1958年代にはつかわれていなかったのが、最近つかわれるようになっていく語もある。

前者は「老婆」であり、後者は「お年寄り」「老婦人」などである。（表1）（表2）

（表1）〔語彙面からみる推移（男性）〕

	1948・49年		1958年		1968年		1978年		1987・88年	
	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日
老人	3	2	10	11	24	10	31	25	15	18
お年寄り	0	0	0	0	0	0	0	1	2	6
おじいさん	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0
老父	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0
老〇〇 —学者 —教授 —記者 —など	4	0	0	3	4	2	0	5	3	4
孤老 〇 〇	0	0	0	0	0	0	4	4	0	1
初老	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0

(表2) 「語彙面からみる推移(女性)」

	1948・49年		1958年		1968年		1978年		1987・88年	
	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日
老人	1	0	2	1	2	1	1	7	3	2
老女	2	2	8	12	12	11	35	33	13	15
お年寄り	0	0	0	0	0	0	2	3	2	1
おばあさん ーちゃん	0	0	1	1	1	1	4	15	4	3
老母	0	0	1	0	0	1	2	6	2	2
老婦人	0	0	0	0	0	0	7	4	0	1
老婆	7	10	1	1	0	0	0	0	0	0
老妻 ○ーマダム など	0	0	2	0	0	0	5	1	1	0

「老婆」は1948・49年の記事に(例1)「老婆殺し捕わる」(1948. 9. 16『毎日』)(例2)「老婆しめ殺さる」(1948. 11. 4『毎日』)のようによくでくる。当時、高齢の女性の傷害事件がおおかったとみえて、この2年間の高齢者をしめす語をもちいた記事33例中半数をうわまわる17例が「老婆」であった。

この語は次第に「老女」と交替していくが、1948年では『朝日』『毎日』とも「老婆」だけがつかわれ、『朝日』で3例、『毎日』で6例採集している。1949年にはいり、『朝日』は7月29日の記事で(例3)「病気の老女を絞殺」とはじめて「老女」をつかっている。『毎日』も7月29日の(例4)「洲崎で老女絞殺さる」ではじめてこの語をつかっている。その後『朝日』『毎日』とも「老婆」「老女」を併用していくが、1958年の時点では『朝日』で「老女」8例「老婆」1例、『毎日』で「老女」12例「老婆」1例とすっかり逆転してしまう。さらに1968年以降の記事には「老婆」は1例もつかわれていない。

「老婆」については辞書の記述でも問題になったことがある。

『新明解国語辞典 第3版』(1981年2月)には次のように記述されていた。
 ろうば〔老婆〕年をとり過ぎて、年輪の古さだけが目に立つ婦人。○老女 ↔ 老爺〔一心〕不必要なまでに人の事について気をつかい、世話をやくこと。

〔老人語は「一切」〕

と記述されていた。この記述が偏見にみちているところから、他にもおなじような偏見でかかれた、「悪妻」「大年増」「女」などの語とともに東京都立城北高校の社会科の先生たちが訂正をもうしいれた。

その結果、1985年2月10日の第31刷から一部内容があらためられた。

「老婆」に関しては、次のようになった。

ろうば〔老婆〕〔一心〕不必要なまでに人の事について気をつかい、世話をやくこと。〔老人語は「一切」〕

「老婆」それ自身の語釈は全部削除し、この語と結合した複合語だけをのせるというかたちをとっている。批判された部分を削除しただけの処理のしかたである。

他の辞書でこの語をみると、

「年とった女」（『現代国語例解辞典』小学館）「〔文〕年とった女。老女。」（『三省堂国語辞典 第三版』）「年をとった女」（『岩波国語辞典 第四版』）と、『三省堂国語辞典』に〔文〕という記号で、文章語であるとの指示をされている以外、「老女」とのちがいを指摘した記述はなされていない。その意味ではあらためる以前の『新明解…』は「老女」とのちがいをだそうとしてゆきすぎてしまったともいえる。

今回の調査で、「老婆」は1950年代までは新聞につかわれていたが、それ以後まったくつかわれなくなった語であることがわかった。つかわれなくなった理由が、「老婆」の語のもつ否定的な意味・語感にあることは当然推測される。「年とった女性への蔑視の意味が含まれていると批判が起きている」とする著者もいる。（高木正幸『差別用語の基礎知識』土曜美術社 1988）

そうである以上、辞書の記述もそれらの事情を反映したものであることがのぞましい。つまり、「老婆」が忌避されて「老女」にかわった事情からかんがえられるこの2語の意味のちがいと、つかわれかたの実態をしめすことである。

『新明解一』が語釈を削除したのは姑息な処理だが、もしも、「老婆」は「老女」にすっかりせきをゆずってしまったから語釈をつけるにはおよばない、との判断でなされたのであれば、それはひとつの見識の表われといえる。しかし、これはあくまでも、善意にみた解釈であって現実的ではない。『新明解一』には、現

代語としては死語と化したものを採録し丁寧に語釈をつけている例が他にいくらかでもみつけられるからである。

I-2 「(お)年寄り」ならいいのか

つぎに「(お)年寄り」にうつる。この語は、1978年代からつかわれはじめている。それ以前は1例もない。

「年寄りの冷や水」「年寄りと古籠は使い得」のようにふるくからつかわれている「年寄り」に接頭辞「お」をつけて、高齢者一般をさすようになったものである。1978年の4例、1988年9例（「お年寄り けが」などのミダシで数人の高齢者が記事になっている場合もあるので、表1、表2の語の例数と人数とが一致しないことがある）のいずれも「お年寄り」のかたちでつかわれている。

(例5) 「お年寄り 17人けが」(1978. 8. 17『毎日』)とか、

(例6) 「お年寄りはねられ死亡」('88. 3. 3『朝日』)

というようにである。従来のことわざなどの「年寄り」ではなく、「お」をともなった語形でもちいることによって、「老人」「老女」といった高齢であることを露骨にしめす語よりやわらかく表現しようとしているものとおもわれる。

ただし、「お」をつけたことで「老人」といわれるよりよいと、だれもが感じているとはかぎらない。

幼稚園などで多用される「お絵かき」「お遊び」は丁寧というよりみみざわりだし、銀行などの文書の「お」のつけすぎを過剰とする説（『敬語』大石初太郎ちくま文庫 p.128）もあり、「お」をつければそれだけきいてころよくなるとはかぎらないからである。

むしろ、「お」をつけて、尊敬するかにみえて実はことばのうえだけという空虚感を助長する危険もあって、「お年寄り」が最近ふえてきたことをすなおにはよこせない気がついのである。この語については「最近はやや媚びた思いが感じられるようになった」とのべるひともある。（『お年寄り』アードマン・バルモア／前田大作 九州大学出版会 '88. p.4）

「おじいさん・おじいちゃん」「おばあさん・おばあちゃん」も1948年49

年には1例もなかったのが1958年からすこしずつあらわれ1978年の「おばあさん（〜ちゃん）」は15例にもつかわれている。この語はハナシコトバにつかわれるところからも「老人」「老女」より日常的なしみをこめた語とされる。新聞記事にもくだけたしみを要求されるようになったことの証左であろう。

しかし、これも「お年寄り」とおなじように、しみが、なれなれしさに通ずるところから、読者や該当者に、不快感をひきおこすことも考慮にいれる必要はあろう。

「おばあちゃん」なんて呼ばれたら、あんたのような孫をもった覚えはないね、と言ってやると語る女性もいるし、家族にでも「おばあちゃん」と呼ばれるのはいやだという投書があった。

…孫が生まれて四年になるが、一緒に暮らしていないので、たまに「おばあちゃん」と呼ばれるとまごついてしまう。そして面白くはない。

…とかく年をとるとおじいちゃん、おばあちゃんとして家庭の場で何事にも遠慮がちに暮らさなければならぬ昨今である。何とも寂しい。せめて呼び名だけでも何とかならないものか。（'87. 1. 24『朝日』）

だとすれば、他人である新聞記者に、おばあちゃん呼ばわりされるのはもっともっと不快なことにちがいない。

I-3 「老婦人」と「老女」

「老婦人」もあたらしいものである。1978年以降いくつか例があるが、それ以前は1例もない。この語は、

（例7）「マンションで老婦人殺さる」（'78. 6. 16『朝日』夕）

（例8）「老婦人二人ひき逃げ」（'78. 3. 13『毎日』夕）

のようにつかわれているが、このおなじ事件を報じるのに、それぞれもう一方の新聞では「老女」をつかっている。（例7）と同じ事件を『毎日』は、

（例9）「老女殺さる」（'78. 6. 16『毎日』夕）

と報じ、（例8）とおなじ事故について、『朝日』では、

（例10）「老女二人はねられ死ぬ」（'78. 3. 13『朝日』夕）

と報じている。

これらの例でみるかぎりでは、「老婦人」と「老女」に特に明確なつかいわけの意識がはたらいているとはみられない。

しかし、区別する意識がまったくはたらいっていない、とはいえない例もある。

他の例では「老婦人」は、

(例11) 老婦人の家・土地乗っ取り（'78. 6. 4 『毎日』）

(例12) 老婦人“健脚パワー”（'78. 10. 22 『朝日』）

(例13) 私が目となりツエとなり／視覚障害者へ老婦人が協力

（'78. 3. 18 『朝日』）

(例14) 帰宅途中の老婦人給料ひったくられる（'78. 4. 1 『朝日』夕）

などであって、(例12)は「大阪・兵庫のオールド・ウーマンで…『東海道自然歩道』を歩き通した」という記事の、最高79歳の女性をふくむグループのこと、(例13)も視力障害者の手足となる婦人のこと、といずれも積極的な活動をする女性を評価した記事中でつかわれている。(例11)、(例14)は被害者としての女性である。

「老女」のばあいには

(例15) 一人暮らしの老女が焼死（'78. 1. 27 『朝日』）

(例16) 強盗か、老女殺さる（'78. 4. 28 『朝日』夕）

(例17) 老女スリ、また御用（'78. 11. 20 『毎日』夕）

(例18) 73歳の老女を逮捕（'87. 11. 5 『朝日』）

と、(例15)、(例16)のように被害者と(例17)、(例18)のように犯罪者をさすばあいのどちらにもつかわれている。「老婦人」で犯罪者やマイナスイメージの人物をさす例はない。

「老女」はふつうの人物とマイナス評価の人物をさすが、「老婦人」はマイナス評価の人物をさすことはない。「老婦人」のイメージが「老女」よりよいとされているのである。

(例5) 老婦人 → (例7) 老女

(例6) 老女 → (例8) 老婆

の交替はいずれも被害者だったから、置き換えることができたのである。

I-4 「老人」

つぎに、「老人」の語をみる。

男性のばあいは、どの年代でもいちばんおおくつかわれている。女性の高齢者をこの語でしめすこともある。それは、

(例19) 老人狙い連続殺人 浜尾重夫さん (73) と宮崎ヤスエさん(66)…(『毎日』 '78. 12. 18)

のように複数の高齢者を「老人」のミダシで一括し、そのなかに女性もふくまれていることがある、というばあいと、男性の高齢者をあつかうおなじあつかいかたの、

(例20) コタツの過熱で出火老人死ぬ 市橋さださん (92) は…(『毎日』 '78. 11. 18)

のようなばあいとある。

後者のようなばあいは、ミダシだけでは男性か女性かわからない。しかし、それでなにか不都合がおこるだろうか。報道の目的が高齢者が事故でなくなったことをしらせるためだったらこれでかまわないわけだ。

女性の場合は「老婆」「老女」「御婦人」など、女性だけを表す語と「老人」とであらわされているわけである。女性側だけいくつものいいかたがあることから、男性がわの語についてもすこしかんがえてみたい。

「女性に関する言葉を考えるとき『対』になる言葉があるかを考える」とある新聞記者はのべている。「英語では『対』になる言葉がない場合、それを女性の表現として使わないで、別の言葉に置きかえることが定着している」('88. 1. 26. 『朝日』) という。

「老婆」に対する男性側の語として「老爺」があるが、この語は最近の小型辞書では採録されていないものもある。また改訂で落とした辞書もある。『例解新国語辞典』(三省堂 1984年)は前者の例で、後者の例は『新明解一』(第3版 31例)である。『新明解一』では、先に述べた「老婆」を修正した85年の改訂(版は同じで、印刷で一部修正したもの)以前の「老爺」の語釈は、

ろうや〔老爺〕＝著しく年をとったため、動作に活発さを失い、過去の思い出に生きる男性⇔老婆

とされていた。それが「老婆」の語釈を全面的に削ったとき、この語もこの注釈

もすっかり消されてしまったのであった。この辞書でみるかぎり、現代語に「老婆」「老爺」の語は存在しないことになるのである。

そのことは新聞で高齢の男性をしめすのに「老爺」の語は1例もないこととも一致する。このような実情をおおくの辞書は反映していないことになる。すなわち、
ろうや〔老爺〕＝年をとった男。↔老爺（『現代国語例解辞典』）

＝年をとった男（『岩波国語辞典・第四版』）

などとしかかかれていなくて、この意味なら新聞にもふつうにつかわれてもかまわないはずなのに、なぜつかわれないのか、の理由はわからないのである。

「老爺」がつかわれなくなったのは、「老婆」とおなじような経緯があったはずだが、それが辞書ではまったくわからないのである。

「老女」に対する語として「老男」という語がかんがえられるが、それはない。いや、こうかんがえるのはもともと発想が逆なのである。

そもそも「老人」は主として男性（「人」は男性であるとの男性中心の発想は英語のmanにもみられる）であったところ、そのなかの女性をしめす語も必要になって「老女」ができたので、これは「女医」「女学生」などのできかたとおなじである。だから「老女」があって「老男」がないのはおかしいとかんがえるのでなく、もとにもどって、「老人」は男性も女性もさすことばだから「老女」と区別せず「老人」でどちらも表現したほうがいい、と論をすすめるべきだとおもう。「対」になるはずの「老男」の語が一般の辞書に存在しないということからも「老女」が一方的におしつけられた呼称であることがよくわかるのである。

高齢の女性をさすのに、新聞では「老女」がいちばんおおくつかわれているが、（例20）でみたように「老人」で女性をさしている例もいくつかある。（今回採集したのは20人についての用語で、「老女」143人とくらべ12.3％）その事件なり事故なりが、男性であるか女性であるかによって特別な意味をもつものでなく、高齢であることが報道の眼目であるのなら、男性であれ女性であれ「老人」で表現すればいいのである。（高齢者を「老人」とよぶことの是非についてはあとの章でかんがえていく）

Ⅱ 年齢にみる推移

戦後まもなくに比して近年高齢者がいちじるしく増加したことは各方面・分野で報じられている。人口がふえただけ事件・事故もおおくなり、新聞紙上にでることもおおくなる。

ここでは「老人」として「お年寄り」とよばれた人物が何歳なのかをしらべて、この40年間のうごきをみていく。

1948・49年の新聞で、高齢であることをしめす語でよばれた人物の年齢を、語ごとにみると、つぎのようになる。（例の前部はミダシ…以下は記事中の人物とその年齢）

（例21）老人減多切り…高沢善法さん(64)が…（'48. 5. 15『朝日』）

（例22）洲崎で老女絞殺さる…浜地タケさん(54)が…（'49. 7. 29『毎日』）

（例23）気の狂った老農…荒井久兵衛(57)が…（'48. 2. 19『朝日』）

（例24）池上で老婆殺し…五十歳位の老婆が…（'49. 7. 27『毎日』）

50代で老女、老婆、老農などとよばれている例がおおく、（例24）からは五十歳のはじめですでに老婆とよばれていたことがわかる。これらを新聞に登場した人物の年齢の上限と下限でしめしてみる。

「老人」 64歳～73歳

「老婆」（五十歳位） 52歳～78歳

「老女」 54歳～63歳

「老夫婦」 61歳（男）と62歳（女）

〔1958年〕

（例25）中風の老人焼死…諏訪重雄さん(53)が…（'58. 12. 15『毎日』）

（例26）老女襲わる…佐藤はるさん(58)は…（'58. 9. 17『毎日』）

（例27）七十八歳の老スリ…岡安友次郎(78)は…（'58. 5. 15『毎日』）

など。上限と下限はつぎのとおり。

「老人」 53歳～87歳

「老女」 58歳～86歳

「老夫婦」 61歳と61歳～75歳と71歳

わかい方の年齢は1948・49年の状況とにているが、高齢の例は1948・49年とおおきく様相をかえている。つまり48・49年の最高齢者は78歳であったのが10年後には87歳までのびたということである。これは単に新聞に登場した人物のなかの最高齢者というにすぎないのだが、同時に社会全体の高齢化を反映した結果ともいえる変化である。

〔1968年〕

(例28) ビル火事で老人窒息死…松本俠介さん(58)…(’68. 12. 3『朝日』夕)

(例29) 一人暮らしの老女殺さる…小川不二子さん(60)が…(’68. 5. 5『朝日』)

(例30) 質屋の老夫婦殺さる…田原幸治さん(65)と妻のチヨさん(59)が…

(’68. 7. 24『朝日』夕)

(例31) 見知らぬ老女が…五、六十歳の見知らぬ女の人…(’68. 4. 3『朝日』夕)
など。上限と下限はつぎのとおり。

「老人」58歳～92歳

「老女」60歳～80歳

「おばあさん」70歳～89歳

「老夫婦」65歳と59歳～74歳と62歳

(例28) や (例31) のように記事のなかでは「五・六十歳の女の人」をミダンで「老女」としていることなどからこの年代ではまだ五十代が老人・老女とよばれていたことがわかる。

〔1978年〕

(例32) 百八歳翁が大往生 (’78. 10. 6. 7『朝日』夕)

(例33) 百五歳おばあさん死去。(’78. 2. 6『毎日』夕)

(例34) 医師最長老“百歳”白井さん死去。(’78. 3. 7『毎日』夕)

(例35) 91歳の老女逃げられず焼死。(’78. 2. 25『毎日』夕)

など。上限と下限は以下のとおり。

「老人」63歳～92歳

「老女」61歳～91歳

「おばあさん」 65歳～105歳

「老夫婦」 70歳と63歳～85歳と78歳

ここで1968年からさらに高齢化している。そして50代の人物を「老○○」とよぶ例はなくなっている。この年代の「老○○」とよばれた最年少者は61歳であった。

〔1987・88年〕

(例36) 80歳編集長やります。…八十歳の老編集長も…(’88. 1. 7『毎日』夕)

(例37) お年寄りはねられ死亡…丸藤宮蔵さん (93)…(’87. 11. 25『朝日』)

(例38) はやらぬ老女医の犯行…85歳の老女医が…(’88. 5. 12『朝日』)

など。老○○に職業のくる例がいくつかみられる。上限と下限は以下のとおり。

「老人」 64歳(女性)～101歳(男性)

「お年寄り」 62歳～93歳

「老女」 68歳～85歳

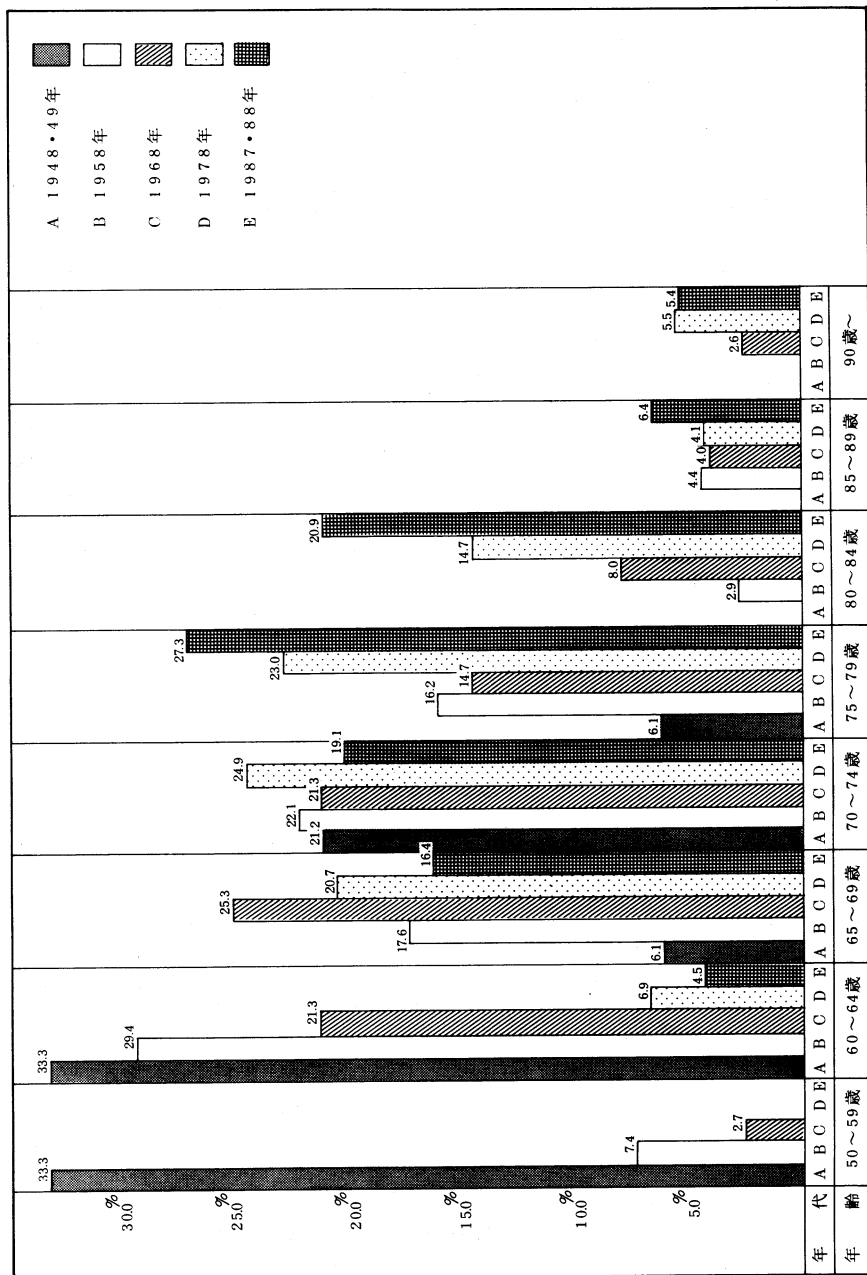
ここでは1978年代と年齢の下限・上限はあまり変化がない。「お年寄り」の下限が62歳、「老人」で64歳というのはすこし意外な感をうける。60代の前半ではまだ現役で活躍中のひとがおおく、経済的にもはたらかざるをえないひとがおおい現状とことばがそぐわないとおもうからである。

高齢であることをしめす語でよばれて新聞にでてきたひとびとを年齢層別にかけてみると、年代をおうごとに高齢層の人物がおおくなっていることがわかる。それをグラフにしてみると図1のようになる。各年代の新聞に載った人物の合計を100とし、それを年齢層別の比率をだして年代別にして比較したものである。

この図で、わかることは、

- ① 1948・49年では50歳代～64歳代の人物がいちばんおおい。
- ② 80歳以上の人物は高齢をしめす語でよばれてはひとりもでてこない。
- ③ 1958年代では、60～64歳の人物がいちばんおおい。50代も7.4%いた。
- ④ 1968年代では50代も2.7%いるが、いちばんおおいのは65～69歳の人物である。
- ⑤ 1978年代から50代の人物はでてこなくなった。

(図1)〔年齢からみる推移〕 A・B・C・D・Eの年度内に出現した「老人」などの言葉を年齢別にみた割合



- ⑥この年代でいちばんおおいのは70～74歳。
- ⑦1987・88年で60～64歳を下限とし順々に率が上がり75～79歳でピークに達し、また順にすくなくなっていっている。
- ⑧年代がいちばんはやい1948・49年のピークは、いちばんわかい50～59歳であったが、年代をおって、ピークが以下のように順に5歳ずつあがっている。

時 点	1948・49年	1958年	1968年	1978年	1987・88年
ピ ー ク	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70～74歳	75～79歳

また、個人についてではないが、役所などで何歳から「老人」「お年寄り」とよんでいるかも、ひろってみた。新聞記事の年代順にならべてみる。

(例39) 老人学校創立二周年の集い…六十歳以上の老人の記念の集いを行う。

('58. 3. 10 『朝日』)

(例40) 老人に都から金品…東京都ではことしから、都内に住んでいる七十五歳以上のとしよりに敬老金品を贈ることになった。('58. 4. 1 『朝日』)

(例41) 老人に楽しみの場を…目黒区内の六十歳以上の老人約一万人のために…('58. 8. 23 『毎日』)

(例42) 老人クラブ福寿会…会員は六十歳以上…('58. 9. 16 『朝日』)

(例43) 老人に無料奉仕…台東区マッサージ師会…六十五歳以上の老人を対象に…('58. 9. 17 『毎日』)

(例44) 老人健康相談…新宿区生活館は六十歳以上の老人健康相談を受付ける…('68. 2. 4 『朝日』)

(例45) 若返っておばあちゃん…若い美容師さん無料奉仕。地元の六十歳以上のおばあさん三十人に…('68. 7. 17 『毎日』)

(例46) おとしよりの健康診断…都内二十三区は各区内に住む六十五歳以上の人に…('69. 9. 10 『毎日』)

(例47) 老人に座ぶとんの贈り物。台東区の老人福祉のつどいで七十七歳以上

の2,945人に…(’68. 9. 14『朝日』)

(例48) 老人・子供の交通災害救済、足立区は…子供と七十歳以上の老人を対象に…(’78. 1. 7『朝日』)

(例49) 太田区に老人専用アパート…六十五歳以上の一人ぐらしの老人の…
(’78. 10. 3『毎日』)

(例50) 老人保健医療給付七十歳で…(’78. 12. 1 夕『毎日』)

(例51) 練馬区三療師会…七十歳以上の独居老人にマッサージサービス…(’87. 9. 2『毎日』)

(例52) 昼食週六日も配達、目黒区独居老人や老人家庭へ。六十五歳以上の老人を対象に…(’88. 8. 2『毎日』)

以上は公的機関・団体から高齢者への施策サービスなどに関するものだが、その施策内容・サービスの質や内容によって年齢も一定していない。また、どれもが1950年代から1980年代へ順に年齢があがっているというわけではない。同じ質のものでく比べると、(例43)(例51)で高齢者へのマッサージサービスが、’58年の対象者は65歳以上であったのが’87年に70歳以上になっている。敬老の日の贈り物は(例40)と(例47)によると、’58年都からは75歳以上だったのが、’68年台東区からは77歳以上になっている。

老人クラブ、老人大学のような個々の人物に経費などではねかえらないものは六十歳以上を対象とし、おくりものように個々人に関係するものは年齢があがっている。福祉対策のしづさがうかがわれる。あまりはやくから老人あつかいされたくないとの該当者の意志をおしはかっての結果といえばきこえはよいのだが、具体的な年齢と施策との関連でみると、福祉にあまりおカネをかけたくない地方自治体などの本心がすかしてみえてくる。

一方、高齢化がすすむとともに、従来どおりの年齢をあてはめるのでは実情にあわなくなってきたのも事実で、それに気づいた官庁の対応も報じられている。

(例53) 高齢者への対応きめ細かく／65歳以上を3区分／総務庁、10月、住宅調査で実施(’88. 3. 20『朝日』)

というミダシで、以下のようにのべている。

総務庁は五年に一度実施する大規模な「住宅統計調査」について、世帯主の年齢区分で「六十五歳以上」としてくくっていた高齢者を「六十五～六十九歳」「七十～七十四歳」「七十五歳以上」の三つに細分化することを決めた。…その理由について総務庁国勢統計課は「ひと口に六十五歳以上といっても、実際はその後十年くらい働いている人が増え続けており、実態にそぐわなくなりつつあった。お年寄りが他人の手を借りるなど、人手を要する年代を七十五歳くらいと判断し、それに見合った区分にすることにした」（松井信夫補佐）としている。

というもの。この課長補佐の説明では実質的に「お年寄り」とよぶにふさわしいのは75歳以上とかがえられていると推測される。

実態がこのようにおおきく変化し、官庁でもその対応を具体的にかえようとしている現在、それらのひとびとをよぶことばもかわって当然なのである。ところが前章でみたとおり、新聞では現在もなお、60代前半で「お年寄り」「老人」よばわりする例が残っているのである。

Ⅲ 高齢者を「老人」「老女」などとよばない傾向

最近の新聞には、

(例54) 七十七歳の婦人公園で焼身（'87. 9. 6 『朝日』）

のように年齢だけをかいて、「老女」「老婦人」などの語はミダシにも記事中にもつかわない例がふえているような気がする。

このようなかきかたは以前にもないわけではないが、最近特におおくなっているような印象をうける。表1・表2で「老人」「老女」の使用数が78年までは順に増加しているのに、87・88年に減少に転じていることからそれはうらづけられる。

(表3)

	48・49年	58年	68年	78年	87・88年
「老人」	5	21	35	41	33
「老女」	4	20	33	68	28

(『朝日』『毎日』をあわせた数値)

従来なら70歳以上で「老人」「お年寄り」などとよばれていた年齢の人物が、87・88年ではそうよばれない例もでてきているのである。

(例55) 足不自由 75歳死ぬ('88. 1. 27 『毎日』夕)

(例56) 75歳ライダーひかれ死ぬ('88. 4. 2 『朝日』夕)

(例57) 87歳、がんと思い込み寝たきりの妻と心中('88. 4. 5 『朝日』夕)
などである。

『朝日』『毎日』両紙が同一事故を報じるばあい、表現が一致するとはかぎらない。一方が「老人」で一方が年齢だけのばあいも、両方とも「老人」のばあいもあるが、最近では両方とも年齢だけをかくという例もあり、「老人」などの語を両紙ともさけようとしているかにみうけられるのである。

70歳以上の人物の事故などを報じる際、従来のような「老人」「老女」などの語をつかっているのと、年齢だけで報じているのとの数をくらべてみる。

	『朝 日』				『毎 日』			
	1978年		1987・88年		1978年		1987・88年	
「老人」「老女」など	59	93.7%	43	67.2%	74	88.1%	41	65.1%
年 齢 だ け	4	6.3%	21	32.8%	10	11.9%	22	34.9%
計	63		64		84		63	

最近の「年齢だけ」のものが78年からくらべてずいぶんふえていること、「老人」「老女」などとくらべた比率も増大していることがわかる。

87・88年の「年齢だけ」のミダンをみると、

(例58) 「ミニ新聞守る86歳記者」(10. 15『朝日』)

(例59) 「富士登山の92歳平井さん、見事に高齢者番付の横綱」(11. 6『朝日』)

(例60) 「83歳税理士自殺」(4. 3『毎日』)

(例61) 「80歳社長会社たたみ渋谷区に8億円寄付」(5. 20『毎日』)

のように、それぞれの高齢者が現役で活躍していてその職業・地位などがかけられているものがおおい。それだけ高齢者でわかかわしく活躍している人物がおおくなり、新聞としても従来の「老人」などの語でくくることの不都合を感じてきた結果であろう。

このように「老人」などの語をつかわない例がふえてくると、特に職業・地位をそえる必要のない人物のばあいも「75歳ひかれる」のように「老人」などの語をさけようとする記者もでてくる。

こうした傾向は、高齢者で「老人」などとよばれることをきらうひとがでてきたことと関係がある。

「老人とは何歳ぐらいからか」のといに対する調査が1978年と1988年に別の団体によってなされている。Aは1978年東京都の福祉基礎調査で、六十歳以上のひとにたずねた回答('78. 9. 14『毎日』)。Bは1988年SCOPE誌が日本の医師2,000人にたずねたもの('88. 9. 15『朝日』)。

A.

老人とは

60歳くらいから	12.0%
65歳くらいから	25.9%
70歳くらいから	42.7%
75歳くらいから	6.2%
不明、いちがいいはいえない	12.7%

B.

高齢者とは

60 歳から	2.0 %
70 歳から	56.1 %
75 歳から	19.3 %
80 歳以上	11.5 %

あまりはやくから老人とよばれたくないという意識が 10 年まえからすでに表明されていたことがわかるし、またその人たちを診察する医師のがわでも 70 代にはいるまでは高齢者とみていないことがわかる。

こうした「老人」「高齢者」をしめす語の高齢化とそれを忌避したい心情を新聞が遅ればせながらみとめるようになってきたともいえるのである。

もうひとつ、「老人」「老女」とよばずに高齢者を紹介するしかたがある。

(例 62) 86 歳 パリ西部で／ダミア死す ('78. 1. 31 『毎日』夕)

(例 63) 荒船長官の実姉が焼死／荒船国土庁長官の実姉久喜はまえさん (79) が… ('78. 3. 28 『毎日』夕)

(例 64) 田中前首相の母フメさん死去／田中フメさん (86) が… ('87. 4. 18 『朝日』夕)

(例 65) 田谷力三さん死去… 89 歳 だった。 ('88. 3. 30 『毎日』夕)

のようなばあいである。これらのミダシ・記事のなかに「老人」「老女」などの語はもちいられていない。こうした記事に登場する人物はなんらかの意味で世間にしられたひとである。いわゆる有名人である。

有名人を記事にするときには高齢者であることを意味する語はもちいずに紹介する、ということである。高齢者であることがニュースの眼目でなく、有名人だからニュースになっている。だから「老人」「老女」などとかく必要はないのだろう。

そうだとすれば、有名でないひとたちは、差別あつかいをうけていることである。だれもがおいて体力がおとろえみにくくなることはさけられないことである

が、そのことを現在では、このましいこと、のぞましいこととかがえられてはいない。だから「老人」とよばれたくないひとが多数いるのも当然で、以下の投書もその1例である。

公務を退いて5年。月日のたつのは早い。この間一度も風邪をひいたことがないのを自慢にしている。(中略) いったい老人とは何歳以上をいうのか。自分が年齢を意識しないで働ければ老人ではないと思う。(66歳・男性('88. 9. 21『毎日』))

このように老人とよばれたくないとおもうひとがふえているのに、有名でないひとが事故や事件に遭遇したら「老女はねられる」のようにかかれてしまう。

さきに、高齢者でも現役で活躍している人物を記事にする際は年齢だけをしるし「老人」などの語はつかわない例が最近ふえていることをのべた。こうした変化は新聞記事をかくがわに、高齢者でも「老一」とするのは失礼だ。そぐわないとの配慮があつてのことだとおもわれる。

一方で、有名でもなく、現役で活躍していることを紹介するのでもない不慮の事故などにあつたひとのことは、はやいばあいは60代の後半になると、「老人」をさすことばで記事にされる。人間は老化の程度も感じかたも肉体のおとろえも、それぞれひとりひとりちがうはずなのに、「老人」「老女」「お年寄り」などと、ひとくくりにして処理されてしまっている。

これは、なもなく市井にいきる一般庶民への差別あつかいではないのか。

最近10年間に「老人」「老女」あつかいをする例がへり、年齢だけをしめす記事がふえていることは、このましい傾向といえるので、この傾向がさらにつよまるようなぞみたい。高齢者であることをしめす必要があるなら、それは年齢をかくだけです、というあつかいにしてほしい。

さらに、新聞が有名無名をとわず、老若男女をとわず、どんなひとにもおなじような配慮をするようになってほしいとおもう。

— お わ り に —

高齢者をよぶことばも、その年齢も戦後40年におおきく変化してきたことがわかった。「老人」「お年寄り」よばわりをしないで記事をかく姿勢がでてきたこともはっきりした。しかし、それでもまだ官庁、地方自治体などの対応の変化とくらべると新聞のほうがおくれていることもわかった。

だれもが高齢化はさけられないのであり、そのとき自分が不快でなくいきられることをねがうものとして、ことばひとつとってもこころよいものであってほしいとおもう。まして有名無名であることで、一方は忌避される語としてそれをさけ、一方でごく当然のようにその語をかぶせられるような不公平なあつかいは困る。新聞記者たちに、かかれるもののみになってこうしたことに気づいてもらいたいものと思う。

('88. 10. 30)